



# 日本の文学

73

堀田善衛  
安部公房  
島尾敏雄

中央公論社

堀田善衛  
安部公房  
島尾敏雄

昭和43年11月5日初版発行  
昭和48年12月15日6版発行

発行者 高梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 株式会社トープロ  
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂  
口絵写真印刷 株式会社トープロ  
本文用紙 本州製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 文房紙器株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

堀田善衛

広場の孤独

鬼無鬼島

安部公房

他人の顔

島尾敏雄

島の果て

単独旅行者

379 359

179

77 5

夢の中で日常

死の棘

出発は遂に訪れず

日のちぢまり

注解

解説

年譜

村松剛

557 542 537 514 486 441 425

口絵

挿画

「他人の顔」

「広場の孤独」「鬼無鬼島」

「他人の顔」

「島の果て」「単独旅行者」

「死の棘」「出発は遂に訪れず」「日のちぢまり」

杉浦康平

片岡真太郎

杉浦康平

稗田一穂

堀田善衛



# 広場の孤独

一

commit〔A〕(罪・過)などを行う、犯す……〔B〕託する、委す、言質を与える、危くする、危殆に陥らしめる……〔C〕累を及ぼす…… That will commit us. それでは我々が危くなる……

(研究社・新英和大辞典・第十版より)

電文は二分おきぐらいに長短いりまじってどしどし流れ込んで来た。

「え——と、へ戦車五台を含む共産軍タスク・フォースは」と。土井君、タスク・フォースってのは何と訳すのだ？」

「前の戦争中はアメリカの海軍用語で、たしか機動部隊

と訳したと思えますが……」

「そうか。それじゃ、戦車五台を含むタスク……いや敵機動部隊は、と」

副部長の原口と土井がそんな会話をかわしていた。木垣は『敵』と聞いてびくつとした。敵？ 敵とは何か、北鮮軍は日本の敵か？

「ちよつと、ちよつと。北鮮共産軍を敵と訳すことになつているんですか？ それとも原文にエネミイとなっているんですか？」

東亞部兼渉外部長の曾根田は、何かというと渉外関係を円滑にするため、という名目で外人記者その他を社用と称して待合へひっぱってゆくところから『お社用部長』という仇名で呼ばれていたが、戦争中サイゴンで仕入れたというしゃれた防暑服に派手な模様入りのストッキングをはいた足を机の上に投げ出したまま、ちらりと木垣、原口、土井の三人を横目で見て

「前後の関係をよく見極めて適当に訳しておいてくれ」

と言ったかと思うと、すつと立って裏口から編集局を出て行ってしまった。ドアがぱたんとしまったとき、吐き出すように

「あれだ、お社用め、何だかびくびくしてやがる。前後の関係をよく見極めて、か、ハイ、シャヨウですかだよ、ばかばかしい」



と言ったのは、平素口数の少い三十か三十一の御国の声であつただけに、木垣はふいとふりかえつて御国の顔を見つめた。しかしその顔には別にこれといった表情もなく、すでに先ほどから辞引き片手にかかつていた、難解なマックアーサー声明を訳しつづけていた。木垣は何となく、この御国という青年は黨員じゃないか、と直感的に考えた、しかし、この反動をもって鳴る新聞社の、それも渉外部に黨員がおいてあるはずは、まずないであらう……。

そう考えて木垣もまたさつきからかかつている夕刊用の長い香港電報の翻訳をつづけた。その電文の要旨は、いかに中共が香港、澳門などを通じて戦略物資の買付けに努力を集中し、かつは台湾からさえ石油製品が中共地区へ密輸されていることなどを報じて、朝鮮戦乱勃発とともに、次第に困難なものとなつて来た中共承認済みの英国の立場を、一層ぬきさしならぬものにしようとする、一種意地の悪い底意の感じられるものであつた。訳しながら、ふと彼は電文中の commitment という言葉にぶつかつて鉛筆をおいた。夕刊第二版のメ切りまで後わずか十五分くらいしかなく、手を休める時間のあるはずはなかつたのだが、それでも彼の眼と頭はその言葉に吸いつけられていった。commit—罪・過ナドヲ行ウ、為ス、犯ス、……ニ身ヲ任セル、危クスル、言質ヲトラレ

ル、引キ渡ス——翻訳機械のようになった頭は、この言葉にあてはまるべき訳語を次から次へと自動的にひき出していったが、その自動作用が漸次弱まってくると、彼は、いまこんな仕事をしていること自体、それはすでに何かの commitment をしてしまつたことになるのではないか、という、背筋にある冷たいものの流れるような反省が湧き起つて来た。それはいまにはじまつたことではなかつた。しかし、いま、北鮮共産軍をやみくもに『敵』と訳するかどうかという議論のあつた後だけに、コミットメントという一語は鋭く彼の虚点を衝くものを含んでいたので。しかし、とにかくメ切りが切迫している。彼はぐいと唾液を飲み込んで再び先を訳しはじめた。訳し終つて原稿をボーイにもたせてやり、椅子の背に身体をもたせかけると、背後で

「……Gotta goodie, Doi ?」

というメリケンスラングが聞えた。

「None, none, everything's bad !」

何かいいニュースがあるか、なんにもありません、というわけであるが、話しかけた方は顔つきからして、いかにも幼いころから味噌汁をすすり、畳の上をはいずりまわつて育つたに違いないどす黒い面相なのに、汚らしいアメリカのスラングを使い、黄と緑のアロハシャツをひらひらさせていた。話しかけられた土井は二十七、八

歳の二世だが、戦争中憲兵隊の通訳をしたため（これもまた一つのコミットメントだ……）米国へ帰れなくなつた、まだ少年とも言うべき渉外部員である。二人はつづけてあたりかまわぬ米語で女の話をはじめ、二人とも外国人風な身振りと言や肩の動かし方を真似て大げさに笑つた。二世の土井少年の方は、それでも不自然でなかつたが、皺だらけな日焼け顔のアロハシャツは、猫が片手をあげてふざける時のような甘たれた表情で、しきりに戦争中マニラで買った女がいかによかつたかという話を、言い廻しに困るとスラングでごまかしながらつづけていた。

夕刊第三版メ切り間際に、低い、下腹にひびくような号外発行を知らせるブザーの音がして急に政治部のデスクに人がよつていった。共産党弾圧の政府発表があつたのだ。副部長の原口は、すぐに電話をとり上げ、人をはばかりような声でいまの弾圧をめぐる裏話や朝鮮の戦況の悪いことなどを誰かに報告し出した。おそらくは政界か財界のボスに情報を提供しているのであらう、と木垣は思った。原口は一応その電話を切ると、すぐにまた受話器をとつてある雑誌社にかけ、時局解説ができていないから取りに來い、と言ひ、受話器を置くや否や

「ボーイ、ます目の原稿用紙！」

と嗷鳴つてボールペンで荒々しくその時局解説なるも

のをなぐり書きに書き出した。原口は、身体の大きな西洋人だけに似合うはずの、根の形がそのままむき出しになつた巨大なパイプをくわえ、濃い煙を吐きつづけて吐いて猛烈な勢いでペンを動かし、三十分もたたぬうちに十数枚の原稿を書きとばした。木垣はその原稿が活字となり、何十万部か刷られて日本の隅々まで滲透してゆく光景を思い描いてみた。しかし、何も雑誌ばかりではない、木垣自身が朝からつづけさまに訳しつづけて来た新聞記事すらが、無署名なるがゆえになお一層動かしがたい真実として人々の眼にうつるのではないか。彼は再びコミットメント、という言葉の思い浮べて

「やっぱりだ……」

とふと呟いた。

そこへ会議室から編集総務が電話で渉外部、東亜部全員と論説委員などの朝鮮戦争対策を議題に連合会議をやるから、デスクは一応木垣にあずけて、全員会議室へ來い、と言つて來た。

どやどやと十一、二人の人間が引きあげていったが、その間約三十分、不思議にさして重要な電文も電話送りの記事も来なかつた。木垣は机の上に足を投げ上げて考え込んだ。

「——やっぱりだ……」

しかし何がやっぱりだというのか。彼は二年前にS新

聞社をやめ、以来京子とともに翻訳の下請け仕事をやりたりして細々と生計をたてていたのだが、それが、朝鮮に戦争が勃発すると、各新聞社ともに東亜部及び総司令部の戦況発表を扱う渉外部が急に多忙になり、人手不足になったところから、この新聞社に臨時手伝いとして呼び出されたのであった。

二年前、彼がS社をやめた時の、そのやめ方については彼自身かえりみてやましいところはほとんどなかった。戦後に発足した新興紙のS社はたちまち経済的危機に見舞われ、出所のあやしげな資本を導入しなければやってゆけない状態にたちいたった。従業員組合は連夜十時ごろまで大会を開いて新資本を呑むか否かを議論した。もちろん勢いの赴くところはすでに明らかであった。その最後の大会の、ぎりぎりの採決に入る直前、二十六、七歳の若い文化部の記者が立ち上った。

「緊急質問をいたします。それでは委員長は、われわれをあの呪うべき戦争に追いやり、しかも戦争で肥え太り、いままた虎視眈々と復活の道を狙っている追放資本をわが社に入れ、その資本の代弁者が重役として入って来て編集方針に容喙するとうい、そういう最悪の条件を認めよ、と言われるのですか？ 何も根拠はありませんが、その資本は、いま疑獄事件として法廷に持ち出されているS電工事件関係者から出たものという噂がありますが、

どうなんですか、その点緊急質問としてお伺いしたく思っています」

思えばあのころから、この国の社会は底の方で揺れ出したのだ……。この質問に対して委員長が何と答えたか、木垣はすでに忘れてしまっていた。おそらく忘れるしかないような、何の具体性もない返答であったのであろう。営業部や広告部、もちろん編集局内部さえも「いまさら追放資本だなんて。若い奴は困ったものだ。あいつ党员じゃないのか」そういう声があった。質問をした青年は「もちろん共産党员ではなかった。木垣も一時は入党するのが自然だな、と思っていたのが、突然カトリック信者になって人を驚かせた青年であった。木垣は大会ではほとんど何一つ発言せず、新資本が入り、S新聞が一般紙たることをやめて経済記事専門の新聞になったので、当時文化部系だった彼はすることもなくなった、としてやめたのであった。何も旗幟鮮明に追放資本導入に反対だったからではない。はつきり言えば、京子との同棲生活のため、家の問題、いや部屋の問題で困っていた際なので退職金が欲しいという、ただそれだけのことだったかもしれない。その時退職した人々は二十数名あったが、おそらくはつきりと追放資本の導入に反対する、としてやめたのはあの質問をした独身で親がかりのカトリック青年だけだったといっている。

人間は機械化された社会にあつては、生活の喜びを失う、という人がある。その通りかもしれない。しかし、次から次へとテレタイプが海外から送りつけてくる電文を翻訳し、白ゲンと呼ばれる紙切れに訳文を叩きつけてゆき、それがただちに印刷される、その輪転機の、にぶく足もとにひびいてくる唸りを身体に感ずることは、戦慄と言つたら言い過ぎるかもしれないが、そこに一種異様な肉体的な喜びめいたものがあることは否定できない。

二年間の浪人生活中、四六時中世話になり放しの、S社時代の幹部だったT氏を通じて、いまのこの社から呼び出しがあつたときにも、木垣はさまざまに考えた。しかし、輪転機の、あの唸るような呼び声は彼の心の奥の、ある脆い部分をゆさぶるかえし、日本が完全に独立するまでは、新聞にたずさわるまいという、誓いみたいなのをどこかにひっこめようとさえ、彼は努力したのであつた。そして……T氏の好意を無にしてはならぬ、たとえほんの一時だけでも出なければならぬ。と、都合の悪い部分はT氏のせいにし、いわば一種の事故ということにしてのこのこと出かけてゆき、惨烈な戦争の報道を煙草をふかしながら翻訳して、今日で十日目であつた。そして彼は呟いていた——

「——やっぱりだ……」と。  
受付から電話が来た。

「OA通信の外人の方がおいですが、渉外部さんは会議中でしょう？ どうしまししょうか？」

咄嗟に木垣は  
「お通ししろ」

と答えて自分ながら驚いた。臨時手伝いにすぎぬ彼は、責任のある問答のできる立場にない。しかし日本人以外人間、ことに戦争の当事者たる米国人がこの戦争を、ぎりぎりのところどううけとっているのか、本人の口から聞いてみたいという欲望はあまりにも強かつた。彼はその記者を待つあいだ、隣の外信部のデスクにつんであつた外国の新聞を一枚とつた。表題には *Gazette de Genève* とあり、スイスの新聞であつた。日本の新聞より一まわり大きい紙型に、のんびりと形のよい活字がならんでいて、日本の新聞は、いかにも活字がつまつていふという感じであるが、このスイスの新聞は、独仏二カ国語で表裏に同じ記事を扱っているようであつた。たとえ *«Corée»* というフランス文字が大きく出ていても、それが、彼が毎時毎分扱つて来た *«Korea»* とか *«朝鮮»* とかと同じ意味をもつた言葉とは思えなかつた。

——のんびりして見るように見えるな。

と思つて第一面をのぞき込むと、そこは文芸欄で、パリーの文壇消息のようなものを伝えていた。《サルトル氏、再びモオリヤック氏と論戦》という見出しが眼につ

いた。木垣はこの世界的に有名なサルトル氏の作品は一つ読んだことはなかったが、それでも興味を覚えて読み出し、途中で足を机から下し、緊張した姿勢にかえった。

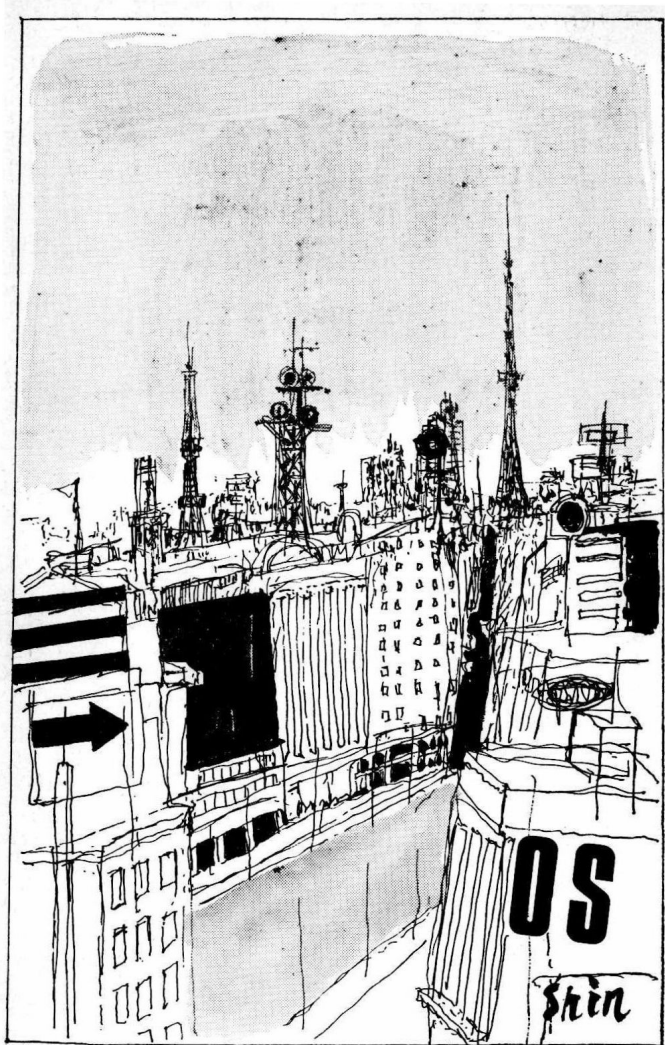
それは文壇ゴシップというにはあまりにも露骨なものであった。サルトルがジャン・カスウ、アンドレ・ジイド、ヴェルコオル、アラゴン、ジャン・ゲノーなど、左翼乃至進歩的といわれる作家詩人たちとともに、フランス政府に中共を承認させ、中共の国連加入反対を停止せしめ、国際関係の緩和に貢献し、印度の平和維持のための努力を援助する目的で、平和と独立フランスのためのアッピールを提唱したところ、カトリック作家のモオリヤックがこれに喰ってかかった、というのである。木垣はこういう言い分に喰ってかかるとは、一体モオリヤック氏にどういふ言いがあつたのか、といささか不審に思つた。モオリヤック氏の言うところは、今に及んでフランスの独立などとはとんでもない言葉遣いである。第一米国防省が独立という言葉をフランスの分派行動のあらわれと見たら、結局フランスはソヴィエト機械化師団に蹂躪されてしまふであらう。もし、サルトルやジイドに、いまなお自由人として生き自由人として死に、みづから真実と信じているところを考えかつ書く機会と自由があり、みづから独立フランス人と称することができると

すれば、それはアメリカの武力を背景とする国際連合が、彼らの書齋を守っているからだ。仕事ができるというところが、そもそもアメリカのお蔭なのだ。中共の国連加入だの、フランスの独立だのと言つてアメリカの対仏不信を招くのは、怖るべき錯誤である……

木垣はこれと同じような議論を、スイスやフランスではなく、この日本の総合雑誌でも何度か読んだことがあるような気がした。モオリヤック氏の言葉のうち、フランスというところを日本と置きかえれば、あれはそっくりそのままではなかつたか……。木垣は時々自分でも、おれはナシヨナリストかしら、と疑うことがあつたが、彼の心のうちには、国の独立と精神の独立とは不可分の関係にあるという、偏執概念のようなものがあつた。

むき出しのセメントの床は、地下室にある五台の輪転機がフルに動き出したので、ディーゼル船のようななかなかな震動をはじめた。もし新聞に、世の難題が次々と解決され人々の不安を鎮めるような良いニュースばかりがのっているものなら、この震動をどんなにか心よく味わえることであらう。へ新聞よ、飛べ、平和の鳩のようにとはいつかの新聞週間か何かの標語である、木垣はふとそれを思い出し汗をぬぐいながらも背筋に冷たいものを感じた。

——寒々とするようなことばかりだ、この暑いのに。



寒々とする、その頭の中で言ってみると、先ほどから commit, commitment と氣としていたことが、モオリヤック氏の言い分に接して一度にはっきりして来た。いま彼が手伝っている新聞の立場は、これを比喩として言えば、明らかにモオリヤック氏の側である。そしていわばサルトル、ジイドの立場に立った雑誌が、その立場のゆえに出なくなつたという噂を二、三日前に聞いたことが思い出された。

——この新聞の手伝いをしてという事実は、個人的な考えのいかんにかかわらず、一切の他者に対して、明らかにこの自分自身がモオリヤック氏の立場に立つカテゴリーの中に入り、これを支持する、つまりそういう風に一步踏み出したことを意味する。

木垣はまた汗をふいた。そして先夜、戦後彼が上海で抑留されていたところに知り合つた、国民党系の中国人記者、張国寿と一緒に横浜へ行つたとき、いわゆる特需景気に酔いどれた労働者たちを見たことを思い出した。張国寿がそれを見て、見たまえ、やはり日本人は戦争を喜んでゐる、と言つたことも思い出された。なるほど労働者たちは、懐ろが温かそうで景氣よく酔つてゐた。しかし、その顔には、張の言うような、あけはなしな喜びや満足の表情があるとはうけとれなかつた。彼はまた「あの爆弾なア、いくつ目だつたか忘れたけれど、ひよ

いとかついたら肩でつるりと滑りやがるんだよ、おれア、ほんとにひやつとしたぜ」

そんな会話を聞きつけた。その労働者の眼に木垣は、不安、不満、またしいて言えばあるうしろめたさのようなものも感じた。それは木垣自身の氣持の反映にはかならなかつたかもしれないが、しかし爆弾をかつぐことによつて、彼らもまた内心のいかんにかかわらず一步限界を越えたのではないか。だが、限界とは何か。新聞社などに出ず、つまり社会組織の中へ現実に入らず、これまで二年間のうちに、家にもつて探偵小説、通俗小説、冒險物語から大戦記録など、手あたり次第、金になり次第翻訳することが、限界を越えず手を清くしてすごすことか。そんなことはありえない。彼の家の近所に住む人で、共産党の新聞に籍があつたために追放されたKという人が、木垣のところへコーヒーやチーズ、バター、石鹸、衣料など、米国品や英国品の行商に來た。その人は來るたびにこれは闇の品物ではない、正規の放出品である、と言つた。弁解がましいところはちつともなかつた。しかし、いかに安くて良質であろうとも、それを売られることはやはり民族産業にとつては辛いことではないか。号外を売り歩く鈴の音が聞える。共産党彈圧のニュースがひろまつてゆく。しかしこれを全然彈圧と思わぬ人もいるはずである。木垣は、自分がたとえ何を考えたに

しても、その物思いは型で鑄たように、定ってどこかで屈折して伸びなくなることを知り、気を紛らすために窓際へ立とうとした。

「Hullo, good day! Is everybody out?」

木垣の頭の上で、いかにも good day というにふさわしい、いささかもかげりのない明るい声が出た。十日前、彼がはじめてデスクについた日にやってくる、すでに顔見知りの外人記者が椅子の背に手をおいていた。O A通信のハワード・ハントであった。彼は部長の席を顎で示して、みな留守かとたずね、開襟シャツからつき出した逞しい腕で顔や首筋の汗をぬぐった。いま会議中だが、十分もすれば終るだろうから待ったらどうか、と言うと、承知したという気持を全身で示して、ゆっくり

「All right.」

と答えて木垣の横の椅子をひきよせ、いままで彼が見ていたスイスの新聞をのぞきこんだ。そして「サルトル、サルトル、日本でまでサルトルは有名か」と肉づきのいい口もとに皮肉味をたたえて吹きながら、いまさつき木垣が読んだサルトルとモオリヤックの論争記事を読み下し

「フランス人たちはあわてている」

と言った。

「いや、フランス人たちは考えているのだ」

と木垣が答えると

「考えているあいだにやられるかもしれぬ」

と応じて来た。木垣はこの返答に手応えを感じ、通り一遍の挨拶をただちに越えてみる気持になった。

「たとえやられるにしても、考えるだけは考えねばならぬ。この記事によると、モオリヤック氏は恐れているように思えるが、サルトル、ジイド氏は未来への道をひらくために考えているようにうけとれる。対立を深める一方の考え方、及び恐怖からは多幸な未来は生まれえない」

ハントは、ヘエ、理屈っぽいね、というように肩をひよいと持ち上げて別のことを言い出した。

「僕はいまさつき朝鮮の前線から飛びかえったばかりだが、今度の戦争で日本人の考え方は随分な影響をうけたらうか?」

「アメリカ式の輿論調査によると、アメリカに頼らねばならぬという気持がぐっと深まったことになっている」

「なぜだろうか?」

わかりきったことだが、君個人の意見を聞きたいという風に、ハントは口もとをゆるめていたが、数時間前まで朝鮮の修羅を前にしていた眼は笑っていなくなった。

「戦争の恐怖、征服され支配されることへの嫌悪!」

「しかし米国も君の国を征服し支配している!」



「その通り、しかしアンコールは御免だというのだ」

「けれども他国の征服や支配は、戦争の結果として、御免だろうが何だろうが、好むと好まぬとにかかわらず結果するものだ。アンコールが御免だと言うなら、なぜ米國に頼らないで自力で防衛しようと思わないのだろうか？」

「武裝は憲法で禁じられているし、以後の戦争では一國だけでの抵抗というものは、米ソを除き、どの國にも不可能であろう。だからフランスは考えているのだ。日本も考えている。サルトル、ジイド氏がモオリヤック氏に反撥するとすれば、それはおそらくモオリヤック氏の考えが恐怖に根差しているからであろう。恐怖は判断の基準についての確信を動揺させる。世界に共通の判断基準がなくなれば、あらゆる議論は反対側にとって、考慮の対象ではなく、挑戦とみなされるようになる。そうなれば理性はその役を果さず、歴史は人間の思考及び祈念をおしのけて自動的に破局へと廻転してゆく……」

単語をくりながら喋っているうちに、木垣は次第に動悸がしてくるのを感じていた。ハントにとってこんなことはただの会話であって議論でさえないかもしれぬ、それなのになぜおれの心臓は鼓動を早めるのか。このおれ自身が判断の基準についての確信を失っているからではないか、恐怖に憑かれて。

木垣が言葉を切ったので、ハントは彼が息入れるつもりだと察して煙草をすすめた。木垣はハントに影響されないで自分の意見をまとめようとし、彼の煙草を断わって自分の煙草をとり出した。火をつけて一服、二服ふかしたところで

「そうなれば……」

とハントは毛むくじゃらな手で再び汗をぬぐい、木垣に後をうながした。木垣は何となく訊問されているような気がすると同時に、この機会に自分の考えをはっきりさせてみようと思った。

木垣が黙って考え込んでしまうと、ハントもしばらく朝鮮で流された血を見続けに見て来たに違いない鋭い眼差しを伏せ、胸の中の何かを抑えるように大きな手を膝に置いた。そしてぼつりと

「朝鮮の情況は深刻だ。しかし米軍は決して海へ放り出されるようなことはない。米國人が血を流して持ちこたえている間に、キガキ、君もゆっくり考えてくれ、僕も考えよう」

と白人に特有、と言っているいい卒直で素直な口調で言い、部長の曾根田に先に会うつもりだったが、会議は大分長い、「みな考えている」ようだから、先に編集局長に会い、と言って木垣に手をさし出した。

二、三步あるいたかと思うと、ハントはまた戻って来